

特集 入試での英語外部試験の導入

「4技能」の入試拡大で英語の授業改善が迫られる

文科省は、英語の4技能をより重視する観点から、外部試験の活用を促している。これを背景に、入試で外部試験を活用する大学が増えている。なかでも4技能を問う新しい英語試験 TEAP の拡大は注目される。一方、新テストでは「英語外部試験の活用」が検討されている。英語外部試験をめぐる状況取材した。

図表1 大学入試で英語の民間資格・検定試験を活用する割合 (国公私立695校回答、複数回答、文部科学省調べ)

	純計	推薦	AO	一般
国立	35(43.2%)	18(23.5%)	11(13.6%)	9(11.1%)
公立	21(26.3%)	17(21.3%)	8(10.0%)	1(1.3%)
私立	243(45.5%)	168(31.5%)	149(27.9%)	34(6.4%)
計	299(43.0%)	203(29.2%)	168(24.2%)	44(6.3%)

同調査では、大学と学生へのアンケート調査も行っている。それによると、外部試験を活用しない大学は、「自校が行っている入学者選抜の方法で十分と考えている」(74・2%)とする回答が最も多かった。その理由の一番に上がったのが、「4技能の能力の測定をしなくても

ウオッシュバック効果

今、英語の4技能の重要性が改めて認識されている。中教審の答申(2014年12月)では、英語は「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能を総合的に評価・育成することが重要であるとして、大学入試における外部試験の活用が提言されている。入試との兼ね合いで注目されはじめた英語4技能。ただ、4技能については以前から言われていた課題でもある。

文部科学省初等中等教育局国際教育課主任学校教育官の齋藤潔氏は、「現在、2020年の学習指導要領の改訂の議論を行っています。前回の2008年の改訂のときにすでに4技能を重視するということは掲げられていた」と指摘する。

問題は、実際の指導現場で4技能のバランスの良い教育があまり進んでいないことだ。ある民間の調査によると、「書く」「話す」という発信型の技能を実践する機会は、中学2年以降に減少する傾向が見られる。文科省・齋藤氏はこの原因について、「入

試で英語4技能の能力が求められることの影響が大きい」と話す。

その一方、大学入試においても4技能を測定する外部試験の活用が進んでいる。入試を変えることで高校の指導現場を変える、ウオッシュバック効果を期待したものである。

大学独自の4技能試験は困難

文科省・齋藤氏は、4技能を測定する入試として外部試験を推奨する理由を2つ上げる。

一つは、大学が独自に「書く」「話す」という入試を実施するには、コストや手間の面で負担が大きいのという点だ。日本英語検定協会が主要国公私立大学の入試関係者100名に行った調査によると、66%が「4技能を測定すべき」としながら、「独自で実施が可能」としたのは11%にとどまっている。大学独自で実施できないという問題に対し、外部試験の活用は一つの解決策となる。

もう一つは、「外部試験の国際的な通用性」(文科省・齋藤氏)がある。それぞれの試験団体の

優秀な学生が確保できる」(13・1%)というものだった。

一方、高校時代に英語の外部試験を受験した学生は37・3%で、その受験者のCEFRのレベルはおよそA2(43%)、B1(31・9%)だった。これは高校生の平均よりもかなり高いレベルだ。外部試験を受験した理由としては、「高校の学習活動の一環として」(35・2%)に次いで、「個人のスキルアップのため」(29・6%)が上がった。

これらの結果から、文科省・齋藤氏は次のように分析する。「外部試験を受験している高校生は、かなり意識が高く、優秀な人がいます。大学側は、本当に優秀な学生を入学させたいのであれば、英語は4技能を測定する試験を考えていかないといけない状況にあると思います」

4技能の能力の測定をしなくても優秀な学生が確保できると考えていると、取り残される恐れがあるということだ。

新テストは民間と共同開発

「高大接続システム改革会議」

の「最終報告」(2016年3月31日)では、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で英語の4技能の評価を推進することが掲げられている。この新テストで外部試験を活用する議論もあるが、実際にはどうなるのか?

「最終報告」では、「民間の資格・検定試験の知見の積極的な活用」の在り方なども含め検討する必要がある」としている。

これについて文科省・齋藤氏は次のような見通しを示す。「民間の事業者の知見を活用しながら、大学入試センターに代わる新センターがある程度関与する形で設計されるのではないかと思います。公的な共通テストという枠組みのなかで、民間の知見を活用するという方向になると思います」

具体的に見ると、「話す」については事例として、「録音機能のついた電子機器(例えば、ICレコーダーやタブレット型PCなど)による音声吹き込み試験」が示されているが、環境整備や採点などの観点から「十



文部科学省初等中等教育局国際教育課主任学校教育官 齋藤 潔氏

スコアは、CEFR(ヨーロッパ共通参照枠)という言語能力を評価する国際指標によって、C2~A1のレベルで客観的に見ることが出来る。これによって、それぞれのスコアを入試の英語試験の点数として換算するなど、入試に活用できる仕組みが整っているのだ。

外部試験受験者ほど優秀

3月に公表された文部科学省による民間の英語の資格・検定試験の活用実態に関する最新の調査によると、2016年度入試で英語の外部試験を活用した大学は43%(図表1)で、2013年度入試の調査よりも7・2%上昇した。推薦は29・2%、AOは24・2%だったが、一般入試は6・3%にとどまった。一般入試における活用がどこまで広まるかが今後注目される。

分検討する必要がある」としている。4技能をどのように測定するのか、課題は多い。

ただ、「書く」「話す」という発信型の技能を新テストで評価する方向が示されていることは重視すべきだ。高校の指導現場では、発信型の英語活動に取り組んでいくことが求められる。

大学入試のためのTEAP

上智大学が日本英語検定協会と共同開発したTEAPは、2015年度入試から導入され、他大学の入試に広まっている。2016年度には青山学院大学や立教大学、東京海洋大学が利用し、2017年度からは明治大学や早稲田大学が加わる。TEAPが大学関係者から評価されている理由の一つは、「日本の大学入試のために作られている」という点だ。

TEAPの開発に携わった上智大学外国語学部英語学科の和泉伸一教授は次のように話す。「試験というのは目的があって、目的から遡って問題構成を考えます。例えば、TOEFLはアメリカ留学が目的ですから、

図表2 一般入試で英語外部試験を活用する主な大学

(2016年度入試、一部2017年度入試情報を更新)

大学名	導入方法・備考	主な試験
青山学院大学	出願資格	TEAP
神田外語大学	みなし満点	Cambridge English、英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEFL Junior Comprehensive、TOEIC & TOEIC SW 等
上智大学	英語免除 (2017年度から全学科一般入試で4技能実施)	TEAP
東京海洋大学	出願資格 (海洋科学部全学科の出願要件、センター、個別とも受験必要)	英検、GTEC CBT、GTEC for STUDENTS、IELTS、TOEFL iBT、TOEIC 等
東京理科大学	出願資格 (経営学部ビジネスエコノミクス学科)	TEAP
東洋大学	出願資格、みなし満点	英検、TOEFL iBT、TOEIC 等
獨協大学	出願要件	英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEIC&TOEIC SW、国連英検 等
法政大学	出願資格	英検、IELTS、TOEFL iBT、TOEFL PBT、TOEIC
武蔵野大学	英語免除	Cambridge English、英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEIC & TOEIC SW 等
明治大学	英語免除&点数加算 (2017年度から経営学部、政治経済学部で実施)	英検、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEIC & TOEIC SW 等
立教大学	英語免除	英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEIC & TOEIC SW 等
早稲田大学	出願資格 (2017年度から文化構想学部、文学部で実施)	英検、IELTS、TEAP、TOEFL iBT
中京大学	出願資格、みなし満点	英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEIC
南山大学	みなし満点	IELTS、TEAP、TOEFL iBT
関西学院大学	英語免除	Cambridge English、英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEIC & TOEIC SW 等
立命館大学	みなし満点	英検、GTEC CBT、IELTS、TOEFL iBT
山口大学	点数加算	英検、GTEC for STUDENTS、IELTS、TOEFL iBT、TOEIC
九州工業大学	点数加算	Cambridge English、英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEFL Junior Comprehensive、TOEIC 等
長崎大学	みなし満点	英検、GTEC CBT、IELTS、TOEFL iBT、TOEFL Junior Comprehensive、TOEIC 等
立命館アジア太平洋大学	みなし満点	英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEFL Junior Comprehensive、TOEIC 等

4技能の学習が効果的
2015年度の英語力調査

（高校3年生）では、依然として「書く」「話す」に大きな課題が見られた。ただそのなかでも、「話す」「書く」のテストスコアが高いほど、スピーチやプレゼンテーション、ディベート、ディスカッションを経験した生

徒の割合が高いという傾向が見られた。文科省・齋藤氏は、「高校の現場で、コミュニケーション活動を取り入れた授業改善を行うケースは少なくなく、それがテスト結果に反映されている」と指摘する。

今後、高校の英語教員は、「入試が変わらないから、授業を変えていくわけにはいかない」という言い訳ができなくなる。授業改善は必要だ。外部試験を授業等で活用する事例としては、

「英語4技能試験情報サイト <http://skills.eiken.or.jp/>」などに紹介されている。

上智大・和泉教授は4技能のバランスの良い教育を勧める。「今の高校の英語は、『読む』『聞く』だけに特化しています。『聞く』だけに特化しています。『書く』『話す』を同時に学んだほうが、後から『書く』『話す』を伸ばそうとしても、頭でっかちになってできません。本来なら『書く』『話す』を同時に学んだほうが『読む』『聞く』の力も伸びます。しかも刺激があって面白いんです」

TEAPのような試験は、本当の実力が問われる。「高校で

は、受験対策よりも、教科書を元に徹底的に面白い授業をやっけてほしい」と上智大・和泉教授は強調する。

受験の公平性の確保が課題

英語の外部試験は、受験料や試験会場の面から、受験の公平性が確保できるかが課題となっている。これについては、受験者数が増えることで、ある程度の受験料の低下や会場数の増加が見込まれるという見方がある。大学によっては、多くの外部試験の選択肢を設けて、できるだけ誰にでも受験機会が得られるよう工夫しているケースがある。

一方で、外部試験は複数回受験が可能で、一つのスコアが複数の大学受験に活用できることは受験生のメリットになるだろう。英語の外部試験を一般入試で導入する主な大学は図表2の通り。利用の仕方は、出願要件に利用するケースや合否判定に利用するケース（点数換算、点数加算）などがある。高校生には早めの意識づけが必要となる。

（取材・文／沢辺有司）



上智大学外国語学部 英語学科 和泉伸一 教授

アメリカの文化的な背景やアメリカの大学の授業を想定した内容が入ってきます。すると、TOEFLの試験のスコアは換算表があるのである程度参考にはなりますが、日本の大学に入る目的にはかなくなっていません。生徒は目的にかなくなっていません。問題をやらなれないといけないことになり、高校の先生方や生徒にしてみても、なぜ日本の高校の授業でTOEFLのために勉強しなければいけないのか、説明がつかいません」

TOEFLはアメリカ留学、IELTSはイギリス留学やオーストラリア留学、TOEICはビジネスを目的とした試験になっている。これら外部試験を入試に活用することについては、高校現場からの反発がある。本来、入試とは高校における学習

到達度を測るものだが、英語外部試験は高校のカリキュラムを反映したものになっていないからだ。

こうした課題に対し、「日本の大学入試のための科学的に検証された4技能の試験」（上智大・和泉教授）を目指して作られたのがTEAPなのである。

高校と大学の接点を測定

TEAPの開発にあたっては、学習指導要領の検証や高校教員への調査など高校側のニーズ分析を行うとともに、大学側のニーズ分析も行った。それによって、高校と大学の「接点」を測定する試験となつていく。

「TEAPには、高校で学習する英語とともに、大学の授業で行う英語の内容も入っています。これから大学で目指すべき英語の能力を示しながら、現時点でどこまでできるかを測定する試験になっています」（上智大・和泉教授）

試験内容を見ると、「書く」「話す」の部分では、現在の高校の英語のレベルからすると、かなりチャレンジングな問題も見受

けられる。

「現時点でどこまでできるのか、学校の取り組みによってかなり差は出てくるかもしれない。しかし、文科省の学習指導要領を見ても、全国的に動こうとしている方向は発信型の英語です。例えば、今までの英作文は、日本語を英語に訳しなさいという短文レベルでしたが、これからは自分の意見を発信できる力が求められます。重要なのは、ただの発信ではなく、エッセイなどを読むなど一度受信してから発信するという英語力です。そのような意味では、この試験自体が、高校英語教育に対する一つのメッセージとなっています」（上智大・和泉教授）

TEAPを大学の授業で活用

センター試験や各大学の個別試験というのは基本的にデータの蓄積がないが、TEAPではTOEFLやTOEICのように、過去のデータを蓄積している。統計的な調査を行い、選別した質の高い問題のみが掲載され、より精度の高い正確な測定を行っている。これによってス

コアの比較が可能となっている。「大学入試は問題内容や質、難易度が毎回微妙に変わってしまっていますが、TEAPはそこが調整されています。前回のスコアと比べて英語力がどれだけ伸びたのかを測ることができず」（上智大・和泉教授）

こうした特性から、TEAPは大学の授業でも活用されている。上智大学では、TEAPを入学時のプレースメントテストとして使うほか、各学年ごとに実施して英語力のレベルチェックに活用していく。

「TEAPを共通に課すことで、学年間の比較や学部・学科間の比較ができます。これによって、それぞれの学年や学部・学科の英語カリキュラムの効果を検証できます。こうした縦横の比較ができるのは、TEAPならでは。今までは、学部ごとに違う試験を使っていたので、比べることはできませんでした」（上智大・和泉教授）

TEAPは、CEFRとも対応しているので、国際的な基準で自分の英語能力を測ることが